公益財団法人大林財団

研究助成実施報告書

助成実施年度	2021 年度
研究課題（タイトル）	建築家高橋公子の住宅設計手法：その工業化志向と実践
研究者名※	野澤 俊太郎
所属組織※	東京大学大学院総合文化研究科　附属国際日本研究教育機構　特任助教（東京大学大学院総合文化研究科　附属東アジアリベラルアーツイニシアティブ　特任准教授）
研究種別	研究助成
研究分野	都市建築史、都市と文化
助成金額	150 万円
発表論文等	

※研究者名、所属組織は申請当時の名称となります。

（　）は、報告書提出時所属先。

（研究報告-様式 2）

大林財団２０２１年度研究助成実施報告書

所属機関名　　東京大学大学院
申請者氏名　　野澤俊太郎

研究課題	建築家高橋公子の住宅設計手法：その工業化志向と実践

（概要）
1950 年代後半から 1970 年代前半にかけて、日本では建材や設備等の急速な工業化が進んだ。本研究は、そのような建築部品化に対する建築家の応答にアプローチすべく、住宅設計において構法とデザインの一致を追求した工業化志向の建築家高橋公子（1932−1997）の仕事に目を向けるものである。とりわけ、高橋の主宰する建築ユニット設計事務所が 1960 年代後半から 1970 年代にかけて進めた建材・住宅メーカーとの共同による設計開発等に着目し、それらの様相を詳らかにするための各種調査を実施した。資料調査およびインタビュー調査等を通じて、これまでほとんど触れられることのなかった高橋自身による論考の数々、図面集、共同研究・共同開発に係る資料等を収集した。それらの資料一式およびインタビュー記録は、建材・住宅メーカーとの共同研究・共同開発の背後に横たわる高橋の建築部品化に対する戦略的態度、並びに住宅設計を巡るロジック等を明らかにし得るものである。

１．研究の目的

1-1　研究の背景および目的

1950 年代後半から 1970 年代前半にかけて、日本の建築家たちは建材や設備等の急速な工業化を経験した。従来彼らにとってデザインの対象であったサッシや建具等が、「部品」として工場で大量生産されるようになった。それは彼らのデザイン思考や設計プロセスに少なからぬ影響を与えたように思われる。いまや工業製品となった建材や設備等は、彼らのデザイン行為から全く切り離されたところで、望むと望まざるとにかかわらず、所定の規格や質感を持つようになったのである。

高橋公子（1932−1997）が建築家として独立を果たしたのは、そのような建築部品化時代のまっただなかであった。高橋は 1965 年に建築ユニット設計事務所を設立している。東京大学生産技術研究所の研究生として池辺陽（1920−1979）に師事した高橋は、建築部品化を前提とする構法とデザインの一致を生涯追求した。そのような工業化志向の設計手法が実践される場として、高橋は住宅設計に飽くなき関心を抱き続けた。本研究は、1960 年代中頃から 1970 年代までの大凡 15 年における高橋公子の仕事を振り返り、高橋が如何に建築部品化と自らの住宅設計（手法）を結びつけ、建築部品化そのものと向き合おうとしたかについて詳らかにするものである。

とりわけ、建築ユニット設計事務所による個人住宅の設計のみならず、建材・住宅メーカーとの共同研究・共同開発に焦点を当てる。住宅部品や工業化住宅等の設計開発等を巡る高橋の一連

の仕事は、高橋の工業化志向（あるいは工業化建築観）や建築部品化に対する戦略的態度の一断面を映し出しているものと考えられる。

1-2　研究の意義および得意な点

高橋公子の仕事を扱った既存文献は、いずれも建築ユニット設計事務所が手がけた住宅を主な考察対象としている [1]。建材・住宅メーカーと共同で実施された設計開発等についてはほとんど触れられていない。また、同事務所が手がけた住宅の大半が特定の雑誌で紹介されていたことから、研究資料として用いられている記事等の出典もまた同誌に集中している。

他方、本研究の関心は、建築ユニット設計事務所による住宅設計以外の活動にも等しく向けられている。建材・住宅メーカーとの共同による設計開発等の様相を明らかにしようとする本研究の試みは、これまで考察に用いられることのなかった雑誌等の記事、図面集、共同研究・共同開発に係る資料等の（再）発見を導くことになる。そして、収集された資料群を考察することにより、同事務所の（とりわけ初期の）仕事の全貌が描き出されるものと期待される。

加えて、建材・住宅メーカーとの設計開発等を通じて高橋が実際何をしようとしていたかを詳らかにすることは、今日の文脈に照らし合わせてもまた示唆的であるように思われる。当時、建材・住宅メーカーは建築部品化の実質的な担い手だったのである。高橋のように 1960 年代を駆け抜けた建築家たちの目には、建材や設備等が自分たちの手を離れ、急増殖したように映っていたに違いない。このような当時の建築家たちと建築部品化の関係は、今日を生きる私たちと急拡大するデジタル技術の関係とどこか似ているところがあるように見える。本研究の社会的貢献は、高橋の建築部品化への向き合い方を描写することにより、テクノロジーの民主化のあり方を巡るヒントを導き出すことにある。

1-3　研究課題

本研究は、具体的に以下 3 つの課題に取り組むものである。

- **建材・住宅メーカーとの関係**　高橋公子並びに建築ユニット設計事務所は、如何に建材・住宅メーカーと関わりを持ち、どのような設計開発等を実施したかについて整理する。
- **住宅設計と建築部品化の結びつけ方**　高橋は構法計画と一体化した住宅設計手法を実践する過程において、どのように建材や設備等を含む住宅部品の選定を行い、必要に応じてそれらを改良あるいは開発したかについて把握する。
- **高橋の工業化志向の相対的立ち位置**　高橋の仕事を相対的に理解するため、同時期に高橋と似たような仕事をした建築家たちを把握する。

1-4　研究計画

1-3 に示す課題に取り組むべく、以下 4 つの調査が計画された。

- **文献調査**　1960 年代中頃から 1970 年代にかけて発行された建築系雑誌を通読の上、建築ユニット設計事務所が手がけた住宅および高橋公子の論考が掲載された記事、その他関連があると思われる記事を収集する。併せて、同時期に高橋と似たような工業化志向の仕事をした建築家たちの動静を整理する。
- **インタビュー調査**　同事務所の元所員、高橋に近しい（と想定される）設計者や技術者、雑誌の連載企画における共同執筆者等に対してインタビューを実施する。
- **現地調査**　同事務所が手がけた住宅、並びに設計手法上関係があると想定される住宅の現地視察を実施する。

- **資料調査**　インタビュー調査時に、被験者がお持ちの図面集や共同研究・共同開発に係る資料等を収集する。併せて、同事務所と関わりがあったとされる建材・住宅メーカーに対して、直接資料照会を行う。

２．研究の経過

2023 年 3 月時点における各種調査の経過状況を以下に示す。（資料名や調査対象住宅等の詳細については、書籍等による成果発表時に別途提示するものとする。）

2-1　文献調査

1960 年代中頃から 1970 年代にかけて発行された建築系雑誌計 4 誌から、建築ユニット設計事務所の仕事や高橋公子の論考等を抽出した。高橋が連載を担当していた雑誌については、バックナンバーを購入の上、アーカイブを構築した。

2-2　インタビュー調査

（１）被験者

建築ユニット設計事務所元所員 4 名、工業化住宅等の開発に携わっていらっしゃった設計者・技術者 5 名、高橋とともに雑誌の連載を担当していた共同執筆者 1 名の計 11 名に対してインタビューを実施した。

当初、被験者リストが十分に揃っていなかったことから、インタビューをさせて頂いた方々に関係者（次の被験者）をご紹介頂くかたちで連鎖的にインタビュー対象を拡大させた。建築ユニット設計事務所元所員へのインタビューについては、同事務所が手がけた住宅を紹介する雑誌記事のクレジット等を頼りに、まず元所員 1 名への接触を試みた。同所員へのインタビューが契機となって、他 3 名の所在等が明らかとなった。

（２）手法

事前に被験者に共有された質問リストに沿って聞き取りを行いつつ、想定にない議論へと発展させる半構造化面接法を採用した。文献調査および従前のインタビューを踏まえて疑問点を洗い出し、質問リストとして毎度 5 つから 8 つほどの質問事項を用意した。インタビューの所要時間は 1 回当たり 2 時間程度を想定していたが、2 時間以上に及ぶことが大半であった。

被験者に送付する質問リストには、個人情報やインタビュー記録の取り扱い等について記した「インタビュー調査規約」が付された。同規約に基づき、被験者はインタビュー中のあらゆる選択の自由（例えば、特定の質問項目に対する回答の可否）が保証された。

インタビューの開催形式（対面・オンライン形式）についても被験者にお選び頂いた。地理的制約等によりオンライン形式となった 2 件を除き、被験者の事業所やご自宅等にて対面形式のインタビューが実施された。

（３）記録

被験者の同意を得て、全てのインタビューを専ら記録目的で録音または録画した。

併せて、全インタビューの要旨を議事録として取りまとめた。一部の議事録については、被験者に送付の上、聞き間違い等の有無についてご確認頂いた。

2-3　現地調査

建築ユニット設計事務所が手がけた住宅 1 件（1960 年代後半竣工）、並びに高橋の住宅設計手

法と何らかの関わりがあると想定された建築家の設計による住宅 2 件（いずれも 1950 年代竣工）の現地視察を実施した [2]。視察に際しては、居住者の方々（同事務所にとってクライアントの子息を含む）並びに同席した設計者子息より、住まい方や増改築・修繕の経歴等についてご教示頂いた。

2-4　資料調査

（１）図面集および共同研究・共同開発に係る資料等の収集

インタビュー調査および現地調査を通じて、被験者並びに居住者の方々より図面集や共同研究・共同開発に係る資料を含む計 16 点の資料をご提供頂いた。調査後にそれらの資料を一時的に拝借の上、複合機にてスキャンニングまたは写真撮影を行って画像を収集した。

計 16 点の内訳は以下の通りである。

- **図面集・ドローイング**（3 点）　住宅兼オフィス 1 件の図面集 1 冊および住宅 1 件の増改築工事図 1 冊を含む。
- **住宅の写真アルバム**（2 冊）　いずれも同一の住宅を写したもので、主に工事中の様子を捉えている。うち 1 冊はネガフォトアルバム。
- **プロジェクト報告書・パンフレット**（8 冊）　住宅部品に係る委託研究および設計開発等の成果を取りまとめた書類。いずれも実施主体名義で発行されている。プロジェクト報告書については、建築ユニット設計事務所（または日本女子大学高橋研究室）が一部報告を担当するかたちになっている。発行年は 1971 年から 1978 年に分布しており、資料をご提供頂いた同事務所元所員の事務所在籍期間と符合する。
- **私家版報告書・調査関連内部資料**（3 冊）　うち 1 冊のみ作成年の特定が可能。他 2 冊はファイルに閉じられた資料一式。住宅部品に係る委託研究や設計開発等において発生した原資料（上記プロジェクト報告書を取りまとめる際の下敷きとなった資料）と思われる。

（２）貴重書の収集

高橋の論考が掲載された 1973 年発行の工業化建築および工業デザインに係る貴重書（資料集）を収集した。

（３）建材・住宅メーカーへの資料照会

建築ユニット設計事務所と関わりがあった建材・住宅メーカー3 社に対して、共同研究・共同開発に係る資料の所蔵状況について照会を行った。うち 2 社では所蔵が確認されず、他 1 社については社内にて確認を頂いている。

３．研究の成果

各種調査を通じて 2023 年 3 月までに整理されたことを以下に示す。（収集資料や証言等に基づく考察の結果については、書籍等による成果発表時に別途提示するものとする。）

3-1　総評

本研究の開始当初、殊にインタビュー調査と資料調査の足掛かりを得るのにある程度時間を要した。そのため、インタビュー記録や収集資料等の考察は今後の課題となっている。

他方、約 12 ヶ月にわたり実施した各種調査を通じて、これまで扱われたことのない高橋公子並びに建築ユニット設計事務所に係る雑誌の（連載）記事等とともに、建材・住宅メーカーとの

共同研究・共同開発に係る資料等が収集された。これらの新規資料、並びにインタビュー調査により得られた証言の数々は、同事務所が手がけた住宅のデザインを解釈するだけでは必ずしも見えてこないような、高橋の住宅部品を巡る知見や主張、さらにはそれらの背後にあるロジック等へのアプローチを可能にするものである。

3-2　明らかになったこと・整理されたこと

（１）建材・住宅メーカー等との共同研究・共同開発等

本研究に先立つ事前調査により得られた断片的な情報は、建材・住宅メーカーと建築ユニット設計事務所の間に、メーカーの代理店とその顧客という関係を超えたより密接なつながりがあったことを示唆していた。本研究はその点に対する関心から発展したものである。

これまでに実施した各種調査は、何らかのかたちで建築ユニット設計事務所とともに共同研究や設計開発等を行った建材・住宅メーカー計 7 社の特定を可能にした。未だ断片的にしか把握できていない事例を含むものの、同 7 社との間で行われたプロジェクトの内容が明らかにされた。資料調査を通じて収集されたプロジェクト報告書やパンフレット等には、これまで高橋公子の仕事として明るみにされてこなかった一部プロジェクトの詳細が克明に記録されている。

（２）建築ユニット設計事務所の様相および高橋公子の仕事への関わり方

とりわけ建築ユニット設計事務所元所員へのインタビューにより、1970 年代に在籍していた同僚所員、アトリエ内における所員間の役割分担、事務所外との人的交流等の詳細が明らかになった。元所員より得られた証言の数々から、高橋が執筆活動および各種研究・設計開発により注力していた様子が浮かび上がってきた。

併せて、各種インタビューを通じて得られた情報を文献調査にフィードバックした結果、高橋の論考としてこれまで扱われたことのない雑誌記事 3 誌 13 本の特定が可能となった。うち 1 誌 10 本は共同執筆による連載企画の記事である。クレジットの記載方法が執筆担当者の特定を困難にしていることから、共同執筆者に対して直接インタビューを行い、高橋の担当記事を同定した。

（３）高橋公子の工業化志向

構法とデザインの一致を目指す高橋の住宅設計手法において、住宅部品それ自体が持つ可能性の追求が主たるテーマの 1 つであったことはすでに語られているところである。高橋にとって、住宅部品の可能性は、設計要件への適合可能性と素材感に帰するのであった。

各種調査を通じて得られた高橋の工業化志向を巡る言説や証言は、そのような住宅部品の可能性に係る高橋の判断や選択を支えていたものとして、建材・住宅メーカーとの共同研究・共同開発から得られた知見や経験等があったことを浮かび上がらせた。

（４）建築ユニット設計事務所と施主の関係

建築ユニット設計事務所元所員へのインタビュー、並びに現地調査時に実施した施主のご子息に対する聞き取りは、同事務所が手がけた住宅を紹介する雑誌記事等には現れない実情を伺う機会となった。それは、住まい方や増改築・修繕等の経歴のみならず、同事務所と施主の（よりリアルな）関係や住宅に対する施主側の（概してポジティブな）捉え方等に及んでいる。

（５）高橋公子と似たような仕事をしていた建築家たち

建築ユニット設計事務所に係る文献調査等は、高橋と似たような仕事をしていた同時代（同世代）の建築家として、剣持昤（綜建築研究所）および黒沢隆の存在を浮かび上がらせた。

４．今後の課題

今後の研究方針を以下に示す。

4-1　考察の方針

引き続き、本研究の設定する課題（1-3 参照）を踏まえ、収集資料およびインタビュー記録等を用いた考察を進める。

これまでの各種調査の過程で、建築ユニット設計事務所と建材・住宅メーカーによる設計開発等のあらましについてはすでにある程度把握されている。今後は、共同研究・共同開発の実例を体系的に整理するとともに、プロジェクト報告書や調査関連内部資料等の分析を通じて、住宅部品に係る研究や設計開発の背後に横たわる高橋公子独自のロジックや主張等を精査する。そして、1960 年代後半から 1970 年代にかけて建築ユニット設計事務所が手がけた住宅の幾つか（現地調査を行った住宅を含む）に焦点を当て、それらのロジックや主張等が如何に住宅部品の使用、選択、デザイン等に反映しているかについて考察を進めていく。

4-2　調査の方針

以上の考察は、関係各位へのインタビューや資料収集等の継続的な実施を要するものと見積もっている。併せて、高橋の工業化志向を相対化すべく、剣持昤（綜建築研究所）並びに黒沢隆の工業化志向（あるいは工業化建築観）や建築部品化へのアプローチ等について詳細な調べを進めていく予定である。

4-3　成果発表の方針

高橋公子（建築ユニット設計事務所）、剣持昤（綜建築研究所）、黒沢隆の工業化志向について相対的に精査した後、一連の成果を書籍等のかたちでまとめて発表することを検討している。

謝辞

インタビュー調査および現地調査を実施するにあたり、被験者並びに居住者の皆様方に多大なるご協力を頂いた。皆様方の貴重なお時間を頂いたのみならず、建築ユニット設計事務所に係る大切な所蔵資料の閲覧をお許し頂いた。記して感謝申し上げる。建材・住宅メーカーへの資料照会に際しては、結果として関連資料の所蔵がなかったものの、担当者の皆様方には大変親身になってご対応頂いた。ここに謝意を表する。そして、本研究に多大なるご支援を頂いた公益財団法人大林財団に深謝の意を表する。

補注

1) 日本女子大学高橋研究室の会『時間の中の住まい：高橋公子と五つの住まいの現在』東京: 彰国社, 2003; Nozawa, Shuntaro, and Yosuke Komiyama. “High Tech Attitude as a Corrective of Japanese Industrialised Housing: The Work and Discourses of Kohko Takahashi.” *Proceedings of the Eight Annual Construction History Society Conference*, 483–95, Queens’ College, University of Cambridge, United Kingdom, August 2021.
2) 建築ユニット設計事務所が手がけた住宅のうち、2022 年度の時点で少なくとも 7 件（1960 年代竣工 2 件、1970 年代竣工 1 件、1980 年代竣工 3 件、1990 年代竣工 1 件）の現存が確認されている。いずれも住居としての使用が継続中である他、いくつかの住宅では住まい手が変わっていると見られることから、それらの見学は必ずしも容易ではない状況にある。